史　苑（第三十四巻第二号）

千葉市の都市景観と緑の環境

正　井　泰　夫

都市景観における自然ないし自然的環境のあり方に関する考え方は、時代および地域によってさまざまである。自然よりも人工物に重点をおく環境・景観整備が当り前の時代や地域・国などもなくない反面、自然をより積極的にとり入れた都市環境を指向する場合も少なくない。現時点における自然の問題は、「緑」ということばによって象徴的に説明される。特に日本の都市では、この「緑」のあるべき姿に対して、現実の都市環境、都市景観はあまりにも不十分なことが問題となっている。われわれは、この「緑」の問題に対して、より積極的な解決策を打ちたてなければならない。千葉市の都市景観のあるべき姿にとっても、この「緑」の問題は、避けて通ることのできないものの一つである。

一　都市の景観シンボル

われわれが旅行をしたり、あるいは景観写眼などを通じてある都市を見たりする場合、そこに何らかの景観上のシンボル的なものを見出すことが多い。特定の自然あるいは人工物が、あたかもその都市の景観や生活環境を代表するように思えることが少なくないのである。例えば、神戸といえば、日本有数の神戸港と街の背後につらなる六甲山地によって、神戸の景観は大きく特徴づけられている（少なくとも、そう思われている）。大阪といえば大阪城、仙台といえば青葉城（森の都というイメージづくりに青葉城は大きく貢献したといわれる）、長崎といえば坂というようにである。

このように、都市景観におけるシンボル的存在、つまり都市の景観シンボルは、大きく地形・気候・生物・歴史的人工物・近代的人工物に分けられる。

千葉市についてどのような景観シンボルがあるかをみると、現在までのところ、あまり明確なもの、周知のものはないようである。

千葉市は地形的にかなり平凡である。もちろん、関東平

野の中央部の都市とは異なり、海岸という地形環境をもっているが、とりたてていうほどの美観はもっていなかったうえに、最近の埋立てにより、もう景観シンボルとしての価値はほとんどなくなってしまった。後背地の台地や丘陵も、一般的にいえばそれほど目立つ存在でなく、特に中心市街地に焦点をあてて考えると、周辺の台地や丘陵は、景観シンボルとしての価値はあまりもっていないとみてよい。つまり「故郷の山河」というようなイメージづくりを、千葉市の地形条件によってつくり出すことはかなり困難と思われる。

しかし、今後、千葉市の都市化が大きく進み、千葉市というものが、比較的古くより発達してきた中心市街地だけでなく、周囲の台地や丘陵も都市として位置づけられるようになり、かつ、緑におおわれたその地形をうまく都市景観に組み入れることに成功すれば、千葉市の景観シンボルとして、それらの台地や丘陵を利用できないこともないと考えられる。

気候の面で、千葉市を強烈に印象づける景観シンボルを探すことは非常にむつかしいと思われる。つまり、千葉市は他の多くの日本の都市、特に京浜の諸都市とほとんど同じ気候環境にあるからである。

生物の面では、気候の場合よりも景観シンボル化しうる条件を備えているようである。その最も可能性のあるものとしては、植生に関するもので、特に台地・丘陵に残る樹林を中心とした植生であるように思われる。これらの樹林の樹種は、他の南関東の都市のそれと比べて、大きな差異は示していない。しかし、景観の単調化を破りうる丘陵や台地、あるいは海岸の存在は、そこに適切な植生を存続または配置することによって、全体としての景観イメージをつくりあげる可能性をもつ。

同じ植物に関する景観シンボル化についても、人為的に新しい植物景観シンボルをつくりあげることも不可能ではない。この場合、千葉市の環境によく合った植物、つまりそこの自然植生のうちに多く見られるもののうちから選んで植物、またはその植生全体をシンボル化することが最も望ましい。それと同時に、たとえば他から特定の植物を導入してシンボル化する場合（例えばキョウチクトウ）でも、他の都市とは違うものを選ぶことが望ましい。都市景観の単調さを避けるためである。

歴史的人工物による都市の景観シンボルは、京都や鎌倉のような古都、あるいは各地にみられる城下町や門前町の場合は、一般にきわめて簡単である。しかし、千葉市のように特に顕著な歴史的遺産をもたない都市にとっては、正に至難のわざといわなければならない。加曾利貝塚はよく

知られた遺跡であるが、都市としての千葉市の発達と相接つながらないのでシンボル化はむつかしい。

近代的人工物によって千葉市の景観を強力にイメージづけることは、決して不可能なことではない。やり方如何によっては、相当の効果をあげうると思われる。しかし、現在までのところ、近代的人工物、例えば最近つくられた建物や公園・工場・学校などのうちで、全国的に知られうる特異なものはまず見当たらないといってよい。巨大都市でない千葉市でどうやって印象的な人工的設営物をつくるかは、もちろんむつかしい問題である。しかし、何らかの創意と努力がなければ、東京の単なるミニアチャーとして、あるいは同じ人口規模の他の都市とほとんど同じ景観イメージをもつ都市として、千葉市が認識されるだけのことである。

ここで一つ考えられる方法としては、千葉市にユニークな色彩をもたらす創意と努力が考られる。つまり、千葉市を他の都市とは違った色彩にすることである。ここでいう色彩とは、文字通り「色彩」のことであり、どのような色にするかということである。全家屋にどのような色をつけろと命令はできないが、地域住民の総意に基づいて、何らかの特徴ある色彩を求めることは不可能ではないように思う。隣接市から千葉市へはいった途端に、景観的に違った印象を与えるようにすることである。千葉市全域を特定の色彩で特徴づけることが困難な場合は、地区ごと、例えば団地やブロック、街路ごとに、特徴のある色彩をもたせることである。このようなことは、公共施設や団地の場合には比較的容易に行えるものである。

二　都市環境と緑

公害の軽減のために

「都市に緑を」という考えは、今日ではかなり定着してきた。ハワードの提唱による田園都市運動も、中心市街地における公害の増大に対して、より豊かな都市生活環境をつくろうというものであったが、今日でもこの考え方は強く支持されている。

都市に多くの緑を配置することは、特に大気汚染と騒音に対する対策として考えられている。ごく少数の樹木を植えた程度では、ほとんど効果はなく、大量の樹木を植えることによって、ある程度の効果が期待しうる程度である。しかし、ある程度の効果しかなくても、ないよりはましなことはいうまでもない。

騒音の軽減に対する「緑」の効果は、大気汚染の場合より大きい。これは樹木や草は、その形態のゆえに、音を拡散させ吸収させるからである。コンクリートの塀のすぐ内側では、生垣のすぐ内側よりも道路の騒音は入りにくいが、コンクリート塀によって吸収されずに拡散された騒音がひろがり、より広い範囲に騒音公害をまき散らすことになる。高木と芝生の多いアメリカの郊外住宅地は、自動車交通量は非常に多いにもかかわらず、騒音公害は比較的少ない。都市景観に「緑」を導入することの積極的意義の一つはここにある。

都市美観の向上のために

都市における「緑」の問題が、主として市民の健康という点から論議される傾向があるのに対し、都市の美化のためにいう意義はしばしば忘れられがちである。田園都市的環境とは、単に健康上の理由のみならず、都市美観上の問題でもある。

都市景観に「緑」を導入することは、人によっては美観上それほど意味のあるものでないとする考えもある。しかし、大多数の人にとっては、「緑」は安らぎを与え、かつ美的に優れているものである。ただ、日本の都市においては、未だに農村出身者が多いこともあって、農村部で多く見られる「緑」に対し、それほどの意義を認めないとする考え方もある。つまり、農村出身者ないし農村的環境に育った人にとって、都市とは非農村的・非田園的な集落と考えられる傾向もあるからである。もちろん、農村出身の中には、なつかしい思い出の多い農村的環境に絶大な価値を見出す人もおり、いわゆる都市的環境を批判的にとらえる人も少なくない。しかし、全体的にいえることは、農村的であることよりも非農村的・非田園的環境・景観を、より高い文明の段階としてとらえる傾向が強いということである。

このことは、都市における緑につつまれた都市公園を積極的に建設したのが産業革命後のイギリスであり、また、厳密な意味での田園都市運動やニュータウン建設がまず進められたのもイギリスであったことと密接な関係がある。さらに、自然保護と関連の深い国立公園というアイディアが、工業化の進んだ十九世紀終わりのアメリカ大西洋岸に芽生えたこととも深い関係にある。

現在の千葉市をみると、このような都市側からみた田園的環境への憧れをと積極的保護の機がそろそろ熟してよいのではないかと思われる。これには考え方の転換が必要であるが、その素地はほぼかたまっていると見てよかろう。ただ、どうやってそれを表に出すようにするかが問題なだ

けである。

三　都市緑化の条件

住民が関心をもつこと

都市緑化の決め手は、住民が「緑」に対して強い関心をもつことである。行政の側がいくら強い関心をもったとしても、市民が無関心でいれば、緑化は中途半端でおわってしまう。

都市住民はすべて緑化に強い関心をもっているとはいえない。確かに庭が狭いため十分な木が植えられいことも多い。しかし、多少とも空地があれば、そこに何らかの木を植えることが可能である。ところがそのような所は、しばしばごみ捨て場になっていたり、また単に放置されたままになっている。住民の関心は必ずしも高くないのである。

ごく最近においても、植物の少ない環境をよりすぐれたものとみる考え方もあった。費用の問題ではなく、考え方の問題であることが多い。例えば、東京オリンピックの際に建てられた有名な代々木体育館一帯の景観である。確かに近くに広大な明治神宮の森があり、またそれに接して森林公園のミニアチャーが育成されつつあるが、体育館のごく周辺は、広い範囲にわたって石とコンクリートが敷きつめてある。その辺一帯の景観は、極論すれば、砂漠の中にそそり立つ石でできたピラミッドを景観モデルにしたのではないかと思わせる。

日本都市における「緑」の伝統

明治以前に形成されたいわゆる日本の伝統的な都市は、一般的には中国式都市計画をモデルとし、江戸時代になってかなりの改定が加えられたものと考えられている。大筋においては差支えない考え方と思われるが、「緑」に対する考え方は、日本と中国とでは古くより非常に違っていたのではなかろうか。

中国古代文明の興隆した地域は、華北の黄河流域であり、日本からみれば半乾燥地域といってよい所である。華中・華南でも、日本と比較すると、一般に乾燥しており、都市のあり方もその自然環境と無関係ではなかった。その結果、中国では泥・煉瓦が都市建築（農村も同様）に主として用いられ、日本のように植物に圧倒的に依存するという傾向は、ごく狭い範囲に限られている。

鎮守の森・屋敷森というように、日本では建物を木で囲むという習慣が少なくない。大名屋敷など、広い庭をもつ

家では、かなりの数の木が植えられ、しばしば「緑」の多い日本の自然景観をそこに映し出すような庭園設計が行われた。これは中国式の庭と大きく異なるものである。

第一次大戦後入ってきた田園都市運動は、大都市の上層階級に大きくアピールした。それは、もちろん、新規なものとして田園都市運動が受け入れられたことを意味するが、庭をもつということが多くの都市住民にとって実現性のある理想の都市生活形態と考えられていたことにもよろう。これは、ヨーロッパの大陸諸国と比較してみるとよくわかる。ヨーロッパの大陸諸国では、その多くが当時の日本より所得が高かったにもかかわらず、田園都市運動はそれほど普及せず、伝統的な集合住宅（アパート等）が依然として圧倒的に多く建設されたのである。緑化に対する素地があるかないかは、田園都市化の普及度と無関係ではない。

「緑」と市街地人口密度

都市の市街地人口密度は、都市の緑化と密接な関係がある。千葉市も例外ではない。ごく一般的にいうと、市街地人口密度が低ければ低いほど、市街地の緑化は促進しうる。

日本の都市は、全体としては次第に市街地人口密度を低くしつつある。江戸時代後半から明治初期ごろまでは、一般に一平方キロメートル当たり二万人というのが多かった。この人口密度は明治初期（明治十年代）まで持ち越された。

明治十四年頃の千葉（町）の市街地の人口密度は、筆者らの推定によると一平方キロ当り二三、〇〇〇人である。ある程度の誤差を見込んでも、二万人を上回っていただろうと思われる。これが大正時代には一五、〇〇〇人程度に下がり、昭和三十五年頃には八、〇〇〇人程度にまで低下した。さらに昭和四十五年頃には七、五〇〇人へと低下しており、全体としての低下傾向は歴然としている。もちろん、この場合の市街地には、住宅地だけでなく、工場や会社・店・役所・学校・公園なども含まれているので、それだけ住宅スペースが増大したとはいえない。特に千葉市は、清水市などとともに海岸埋立地の工業地区の比率が高いため、全国平均をかなり下回る人口密度を示すものと思われる。しかし、いずれにせよ、家屋の高層化の進展にもかかわらず、全市街地の平均人口密度が低下傾向にあることは否定できない。

市街地人口密度と都市（市街地）における「緑」の量（例―緑被度）は、必ずしも高い相関関係があるわけでは

表1　1970年人口集中地区の例―千葉市との比較

	DID人口	Km²	人／Km²		DID人口	Km²	人／Km²
千葉	36.5万	48.6	7,518	静岡	29.2万	32.0	9,148
東京区部	879.3	549.3	16,008	新潟	27.6	33.6	8,208
大阪	297.8	203.2	14,654	岐阜	26.3	28.2	9,359
横浜	193.5	205.8	9,404	川口	26.1	26.3	9,910
川崎	90.7	88.2	10,283	船橋	26.0	30.6	8,513
札幌	82.3	88.3	9,323	金沢	25.1	25.0	10,047
福岡	72.0	82.0	8,783	市川	22.9	21.9	10,452
広島	50.3	48.7	10,340	松戸	20.3	24.7	8,221
仙台	43.9	51.4	8,546	宇都宮	18.8	26.4	7,120
西宮	36.0	33.3	10,812	清水	18.3	25.2	7,260
熊本	34.7	41.6	8,339	武蔵野	13.7	11.0	12,451
長崎	31.4	27.9	11,271	八千代	3.7	4.5	8,350
鹿児島	30.7	32.4	9,460	全国	5,553.5	6,392.1	8,688

ない。木を植えるか植えないかは、その都市のもつ文化（習慣など）や政策とも関連しているからである。しかし、現実の世界の諸都市における「緑」の量を比較してみると、高度先進国に多いことがわかる。これは公園率だけでなく、公園道路や並木、それに住宅や学校などの緑も含めての話である。特に多いのはアメリカの都市で、アメリカの住宅地の大部分は、いわゆる田園都市型の景観を持っており、高い公園率と相まって、「緑」の量が多くなっている。もっともアメリカの大都市の古い市街地ではそれほど多くないが。

高度先進国に「緑」の量が多いということは、何に基因しているのだろうか。公園や庭をなぜあのようにゆったりとりうるのかを考えてみると、結局、市街地人口密度を低く押さえていることがわかる。「欧米は高層化が進んでいるから市街地人口密度は高い」という見方は、スペインやイタリア南部、あるいはバルカンなどの都市には当てはまるが、高度先進国では日本よりも低い市街地人口密度を示すのが普通である。もっとも、市街地の中心部、例えば旧囲郭内のパリ市だけについてみると、確かに日本より高く、二～三万人平方キロメートルとなっているが、現実の大都市としてのパリ大都市域住民の大半がすむ新市街の人口密度は日本よりはるかに低いのである。

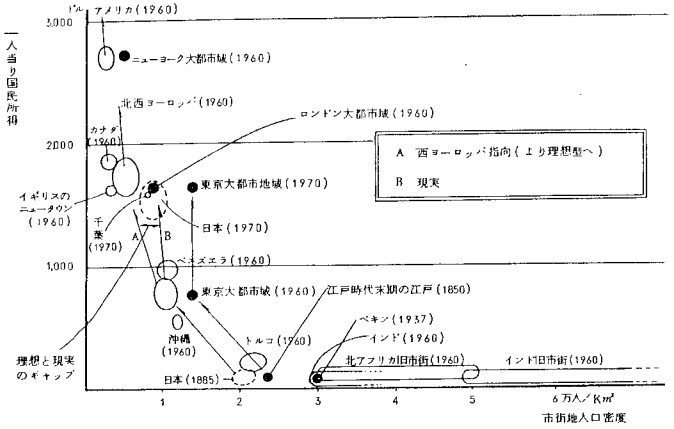
それに対し、いわゆる開発途上国の市街地人口密度は、日本程度か、それともそれより高くなっているのがほとんどである。インドの旧市街は、実に一平方キロメートル当たり五万人以上となっており、オールドデリーなどは数十

万人ともいわれる。

このように世界のいくつかの国について、市街地人口密度を大縮尺地図と人口統計を用いて算出すると、いわゆる先進国といわゆる開発途上国の間に大きな差があることがわかった。先進国と開発途上国の差を一人当たり国民所得で代表させると、第一図のような関係が得られる。はっきりしていることは、アメリカの市街地人口密度が非常に低く、一平方キロ当り二、〇〇〇人程度（ニューヨーク大都市域でも五、〇〇〇人）なのに対し、北西ヨーロッパの先進国が五、〇〇〇人前後を示し、インド・北アフリカなどでははるかに高い人口密度を示していることである。日本は中間的位置にある。いいかえれば、中進国的市街地人口密度といえないこともない。

日本の都市の場合は、明治初期の一平方キロ当り二〇、〇〇〇人から、昭和三十五年（一九六〇年）頃には一〇、〇〇〇人と下り、昭和四十五年には八、五〇〇人程度へとさらに下がってきた。しかし、昭和四十五年の一人当り国民所得は昭和三十五年当時の北西ヨーロッパ諸国とほぼ同じ段階にまで向上してきたにもかかわらず、市街地人口密度はまだ明らかに当時の北西ヨーロッパの状態より高い。このギャップが問題なのである。つまり、五、〇〇〇人程度の市街地人口密度を一応の努力目標とし、理想と一応考

図1　市街地人口密度と1人当り国民所得の関係



えると、理想と現実の間には無視しえないほどのギャップが存在していることになる。これが過密という問題なのである。千葉市は七、五〇〇人程度で、日本の都市としては低い市街人口密度をもつが、広い面積を占める工場敷地を市街地から除いて計算すると、やはり人口過密問題を避けて通るわけにはいかないようである。

「緑」と家屋密度

都市化と「緑」との関係は、家屋密度によっても大局的に説明しうる。一般的には、家屋密度が低いほど、「緑」は多くなりうると考えられる。家屋（建築物）には大きな規模差があるが、しかし、千葉市全域を概観するような場合は、その規模差はそれほど大きな問題とならない。特に緑被度との関係でとらえる場合には、規模差はそれほど問題でなく、むしろ建物の機能差の方が大きな問題と考えられる。つまり、個人住宅地の場合と集合住宅地の場合では、単位面積当たりの家屋密度は後者の方が一般に低いが、それはより高い緑被度の可能性を示すものと考えてよい。また、機能差が大きな問題となるというのは、その建物が倉庫である場合と住宅である場合の違いを考えれば明瞭である。

このような観点に立って、千葉市全域に一辺五〇〇メートルの正方形メッシュをかけ、メッシュごとに家屋数を測定した。使用した地図は千葉市役所作成の一万分の一白地図で、昭和四十五年十月の航空写真測量によるものである。

図2に示されるように、中心市街地が一般に高い家屋密度を示すのに対し、周辺部は一般に低くなっている。しかし、全体としてはかなり不均等であり、都市化の現状を明確に示すものといえよう。緑被度の側から見れば、家屋密度の低い所に緑被度が高いといえる。工場地区は例外であるが、しかし、空地の多い工場はポテンシャルとしては高い緑被度をもちうるわけである。

家屋密度の特に高い地区は、千葉駅周辺であり、中には単位面積（二十五クタール）につき、七〇〇を越す所も二ケ所ある。ただし、千葉駅の正面前方には大型建築物が多く、その結果、家屋密度は比較的低くなっている。全体としていえることは、千葉駅を核とした同心円構造と放射構造が見られることで、家屋分布、人口分布の平面形態は、これら2つの地域構造によって大局的には代表しうる。しかし、より詳細に見ると、主として鉄道駅を核とした多核構造的形態も見られる。特に東京寄りの鉄道駅周辺には高密度の所が目立つ。

千葉駅を中心点として八方角別に家屋密度を見てみると、図3のようになる。方角別に大きな差があることは明らかである。図3で特に明瞭なように、北西方角つまり東京方向の家屋密度がきわだった差異を示している。千葉駅より二・五キロ以上先では、他のすべての方角は比較的低い密度を示すのに対し、この北西方角のみは、ほとんど高

図2　千葉市の家屋密度（1970年、25haメッシュごとの家屋数）

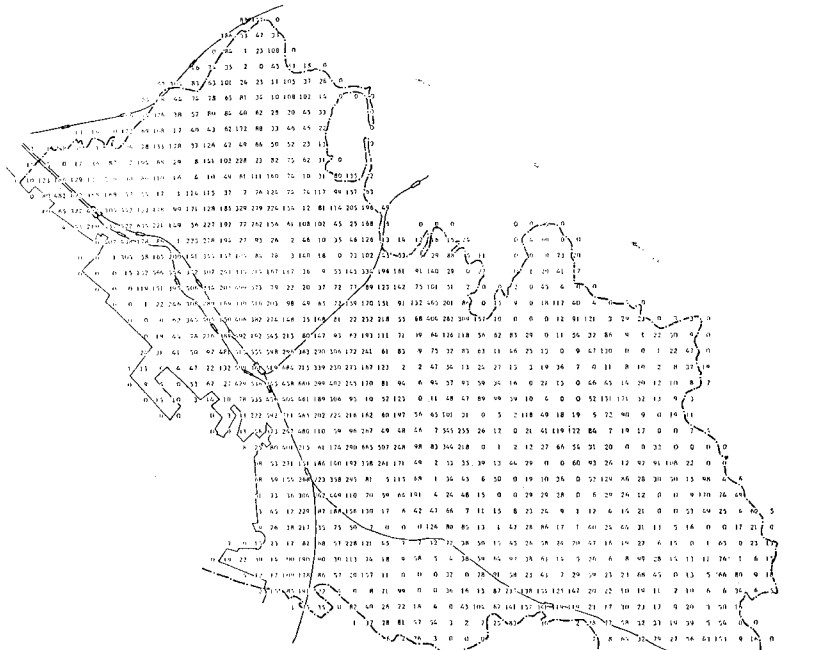
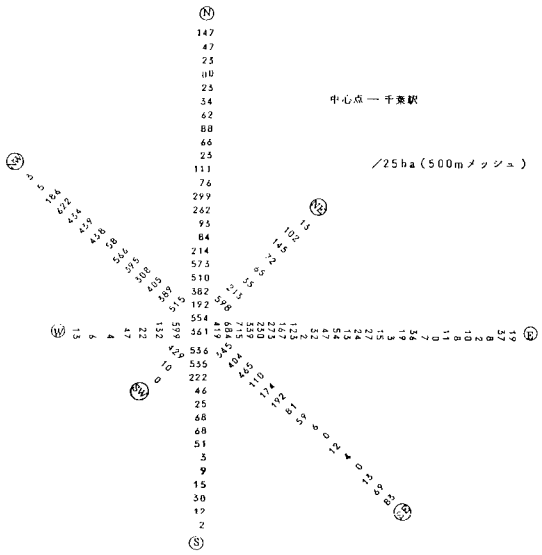


図3　方角別にみた千葉市の家屋密度（1970.10）



い数値を示す。九〜一〇キロの辺では低い数値を示し、一見、都市化の限界のようにも見えるが、実際にはそのすぐ先（習志野市）でまた高くなるのである。このように、北西方角は他の方角と違って、同心円構造の影響をほとんど受けないといってよい。つまり、千葉市の主体

的な都市構造というよりは、むしろ東京へ強く吸引された構造とみなしうる。

「緑」の保全と育成という立場からすると、家屋密度の低い地区に当面の目標を置く必要がある。この場合には、同心円構造のなるべく外側の圏と、ヒトデ型にのびた放射型都市化地区の間の地区が問題となる。千葉市としては、これらの地区の緑をいかにして保全し育成するかが当面の課題といえよう。

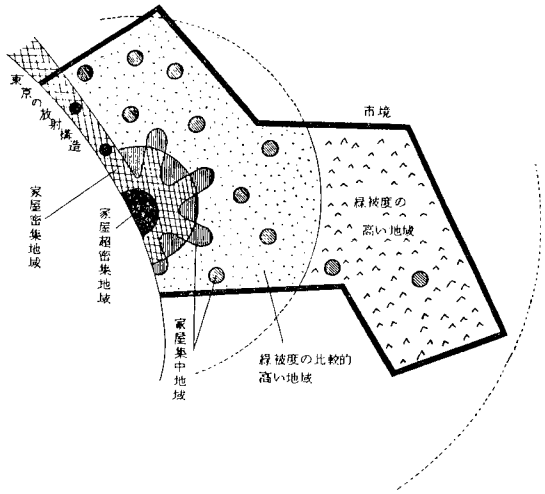
四　千葉市の地域構造と「緑」

以上のように、都市の「緑」のもつ意周を考え、市街地人口密度や家屋密度などと関連させながら千葉市の地域構造をとらえてみると、図4のようになる。

千葉市は、千葉駅付近一帯の中心部を核とした同心円構造と放射構造を持っている。しかし、同心円構造も放射構造も、東京のような大都市ほどには顕著でなく、すぐ緑被度の高い農村部へ移行している。放射構造のうち、東京寄りの方向は東京まではほぼ連続的に都市化されてしまっているので、千葉市を主体とする同心円構造の影響は弱い。また、小規ではあるが多核構造も現われている。ただ望ましい将来の都市化の姿としては、農村部に散在する原初的核の数をふやさないで育成することである。つまり、全域に無秩序に核をばらまき、次第に緑地を侵蝕する方法でなく、今ある核を大きく育てる方向が望ましい。そうすることによってのみ、緑豊かな千葉市の将来が保障されるであろう。

図4　緑被度と家屋密度から見た千葉市の地域構造（1970頃）

同心円構造＋放射構造＋多核構造



なお、この研究報告は、一九七四年春、立教大学を停年退職される別技篤彦先生に捧げます。また、本研究の作成に当っては、千葉市「市民と緑の基本構想」委員会（市企画調整局・公園課・みどりの課および井手久登・石川清文・小田晋・佐藤信行・鈴木啓祐・片谷充克の各氏）に一方ならぬ御助言をいただいた。紙面を借りて深く感謝いたします。

かな解読字典

かなのくずしの習得なしに、古典・古文書の解読はできない。本書は、こうしたかなの基本と実用例を原典・原字主義により復元集成したものであり、先に好評を得た漢字中心の「近世古文書解読字典」とシリーズをなす必携である。本書によって読者は、各時代・時期により大きく変容するかなの全字母とその原字、くずし、連綿体および用例の種々相（一〇〇〇以上の出典から、約二〇〇〇の字母・用例を収録）につき鮮明なる理解と自習効果とを期待できるであろう。●内容　I文字編（ひらがな＝古代・中世、近世・近代初＝カタカナ）　II用例編（古代・中世、近世・近代初）　III参考資料編（万葉仮名、異字・略字、かな筆順、年代表、参考文献）

中田易直・中田剛直・浅井潤子・浅見　恵　編

B6判上製・600頁・2800円

戦国文書聚影　大友氏篇

戦国文書研究会編

今回発刊の「大友氏編」は、戦国時代の大友氏三代（義鑑・義鎮・義統）の施策を示すもの。大友氏に対して時に求心的に、時に離反する在地土豪層、周辺の大内・龍造寺・島津などとの対抗関係を物語るものなどを中心に選んだ。書体・署名・花押など、戦国大名の面目躍如たるものを知り得るとともに、文面からは流動する戦国時代の具体相をうかがえるものと思う。

代表・大分大学教授　渡辺澄夫　法大教授　芥川龍男

B4判・史料図版・解説（A4判）3000円

●水戸天狗党と久慈川舟運　金沢春友著　A5判・上製箱入・2400円

近世古文書解読字典　立教大学日本史研究室　編　B6判・若尾・浅見・西口　編　上製箱入・2500円

近世古文書演習　立教大学日本史研究室　編　A4判・上製箱入・1000円

近世地方文書字鑑　若尾俊平・西口雅子　編　A4判・上製箱入・1000円

近世古文書解読字典　近代文書演習　A5判・650円

柏書房

東京都千代田区富士見2-6-10　電(261)-9155 振替東京5234

内容案内送呈